



観劇時、着用した雨具

野外劇「ヴィルヘルム・テル」を観る

(株) エフ設計コンサルタント

天野 大 (AMANO HIROSHI)

建設部門、上下水道部門、環境部門

総合技術監理部門

1. 2019 年夏、スイス旅

この話は、徳島県技術士会会報 VOL. 31 に「2019 年夏、スイス行」として記した。旅の覚書との認識だ。(図-1) しかし、年を経るにつれ、あの時の体験を、もう少し詳細に記しておきたいという思いに駆られる。特に、観劇の感想を。

今から思えば、よくぞあの時行ってきた！ 行ってきた！！との感だ。当時、関西国際空港からジュネーブ国際空港へ、フィンランド航空機はロシア上空を飛ぶことができた。



図-1 今回の舞台、インターラーケン周辺：Berner Oberland

あれから、世情・時流は大きく、急激に変わった。2019 年 12 月、新型コロナ発生、コロナ禍中に。今も、新聞には週間の罹患者数が載る。そして、ロシアのウクライナ侵攻。フィンランド・スウェーデンの NATO 加盟。イスラエルによるパレスチナ・ガザ攻撃。人命がごみ芥のごとく奪われている。スイス国独立記念日(8 月 1 日)の前夜祭、グリンデルワルトの広場で、主催者の挨拶に応え、「我々は香港人だ！」「台湾人ここにあり！」と声高らかに叫んでいた人々は、今どうしているだろうか。

同時代を生きるものとして、何ができるのかを問われている。(写真-1,2)

スイス山歩は、個人的にも様々なことを体感、考える旅であった。今現在も、その反芻の途上だ。鼓舞されたのは、愛国心。そして、平和であることの恩恵と意義だ。



写真-1 グリンデルワルトでの前夜祭



写真-2 写真右端が舞台

2. 観劇日、2019年7月27日（土）のスケジュールと観劇心得

インターラーケンで、夏季限定で行われる野外劇「ヴィルヘルム・テル」の鑑賞券は、インターネットを使い、自宅に居ながら、座席を指定・入手することができた。（写真-7）

学生時代に使っていた「木村・相良独和辞典」（博友社）を片手に。Berner Oberland は、ドイツ語圏なので。ちなみに、Interlaken とは、「湖の間」の意。独語ではなくラテン語由来。そして、アルプス観光と登山の起点が、このインターラーケンだ。（図-2）



図-2 鳥観図（ハーダークーム展望台上空から南に屹立するスイス・アルプスを観る）

日本で、即席に書き上げた予定表も、現地の天候・交通事情等で変わる。

それらに対応するのも、旅の緊張感であり、面白さだと思う。

(1) スケジュール

当初のスケジュール

7 / 27 (土) グリンデルワルトのホテル →(徒歩)→ グリンデルワルト駅 →(登山電車)→ インターラーケン・オスト駅 →(徒歩)→ 船着場 →(遊覧船)→ 船着場 →(徒歩)→ ヴィルヘルム・テル野外劇場(観劇：20:00～22:30) →(徒歩)→ インターラーケン・オスト駅23:05/00:10 →(登山電車)→ 23:36/00:41 グリンデルワルト駅 →(徒歩)→ ホテル (泊)

スケジュール改訂版 天候：晴れ→曇り→雨→曇り

7 / 27 (土) ホテル →(徒歩)→ グリンデルワルト駅 →(登山電車)→ インターラーケン・オスト駅 →(徒歩)→ 船着場 → 遊覧船出航時刻に時間があるため(徒歩)→ ハーダー動物園 →(徒歩)→ 船着場 →(遊覧船)ブリエンツ湖観光 → ブリエンツ港 →(徒歩)→ ブリエンツ駅 →(電車)→ インターラーケン・オスト駅 →(徒歩・ケーブルカー)→ ハーダークルム展望台 →(徒歩)→ インターラーケン街(写真-3) →(徒歩)→ ヴィルヘルム・テル野外劇場 (観劇：20:00～22:30) (写真-4) →(徒歩)→ インターラーケン・オスト駅23:30 →(バス)→ 24:05ホテル前 →(徒歩)→ ホテル (泊)

(2) 心得

テルの「観劇心得」を紹介する。事前に知っておきたかったことでもある。

① ヴィルヘルム・テル関連のスイス年代記

この戯曲は、フリードリッヒ・フォン・シラー (1759～1805) が書いたもの。

原案は、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749～1832) が傷心 (?) のスイス旅で取材したもの。シラー自身は、スイスへ行ったことがない。Sturm und Drang (疾風怒濤) 文学運動の旗手であったシラーに対して、既に古典主義に向かっていたゲーテは、当初、彼に違和感を抱いていた。しかし、植物学会の会合を機に意気投合、その後、生涯の友となる。



図-3 パンフレット「伝説は生きている！テル」

14 世紀初頭、ハプスブルグ家代官の専政に苦しむスイス 3 州の民衆は、独立を求めて同盟し蜂起する——盟友の文豪ゲーテとの交遊を通じて構想された、「弓の名手」の英雄ヴィルヘルム・テル伝説、スイスの史実を材に、民衆の精神的自由を力強く活写した、劇作家シラーの

不朽の歴史劇（シラー戯曲傑作選「ヴィルヘルム・テル」より）。

表-1 テル関連のスイス年代記

年月日	記 事
1291年8月1日	ハプスブルグ家支配に対し、スイスの3邦が永久同盟を結成する。 その後、加盟邦増加。（8月1日は、スイス独立記念日）
1499年	神聖ローマ皇帝との戦いに勝利し、ハプスブルグ帝国からスイスが実質独立
1648年	ウェストファリア条約で、スイスが国際的に承認される。
1749年8月28日	自由帝国都市フランクフルト・アム・マインで、ゲーテ誕生
1759年11月10日	ヴェルテンベルク公国マールバッハで、シラー誕生
1775～95年	スイス旅行でテル伝説をゲーテが知る。 作劇を友人シラーに譲る。
1792年2月29日	教皇領ベネチアで、ロッシェニ誕生
1804年	シラー、戯曲「ヴィルヘルム＝テル」上梓 題材が、ハプスブルグ家からの自由をスイスが勝ち取った歴史。 この物語で、伝説上の存在テルが一躍英雄となる。
1805年5月9日	ザクセン＝ヴァイマル公国マールバッハで、シラー没
1815年	ウィーン議定書で、スイスが永世中立国であると認定される。
1829年8月3日	ロッシェニ作曲グランド・オペラ「ウィリアム・テル」初演
1832年3月22日	ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公国で、ゲーテ没
1848年	スイス連邦憲法成立
1868年11月13日	フランス帝国パリで、ロッシェニ没
1971年	女性参政権認定（日本は、1945年）
2002年	国際連合に加盟

② スイスの現状と課題

まさに、現在のスイスの立ち位置は、次のとおり。

(a) 武装中立 (b) 地域分権 (c) 直接民主政 (d) ヨーロッパ連合 (EU) 非加盟

③ 野外劇の上演年と開催時期

1912年初演～1914年、1931年～1939年、1947年～毎年 ← 休止期間は戦時中
夏季(6月下旬～9月初旬の火・木・土曜、20時～ or 14時30分～)開催

④ 会場施設

野外劇場だが、観客は屋根付きの階段座席で観劇する。一方、舞台は、観客席前に設けられた土道と石造建物の内外で、まさに屋外だ。少々の雨でも、上演するらしい。役者は、大変だ。能登観劇堂の舞台背後の観音開き大扉（写真-5）とは違う。スケール感が半端ない。（写真-6）

7月27日夕刻は、土砂降りの雨。開演時には、雨も上がるが、気温が急激に低下。インターラーケンの標高は、568m。夏でもレインコート等が必需だ。毛布は貸与される。私は、持参雨具を着用、フードも頭からかぶり、タオルを首に巻いての観劇となる。

舞台である土道は、少々ぬかるんでいる。そこを、馬に乗った兵士役たちが颯爽と駆け抜ける。女性騎手も、見事な手綱さばきだ。これも圧巻也。



写真-3 インターラーケンの街並み
(ハーダークーム展望台からの眺め)



写真-4 ヴィルヘルム・テル野外劇場



写真-5 能登観劇堂（舞台背後が大扉）



写真-6 テル野外劇場

3. 入場から観劇まで

まずは、肝心のチケット。（写真-7）これがなければ、始まらない。パンフレット。（図-3）

また、何事も「百聞は一見に如かず」と考える。以下、時系列で、写真紹介する。（写真-8～18）

開幕前に、「写真撮影、録画はOKです」と会場アナウンスが流れる。これには、正直驚く。映像権だの、プライバシー云々等、日本と違い、厳しい規制がないことが、むしろ凄い。この劇に対する役者、企画、制作や観客の心意気をひしひしと感じる。それが、当たり前なのか？

最近でこそ、終演後の役者挨拶等を観客が SNS で発信することを推奨する日本の劇団もある。喧伝には、これが一番だと思う。

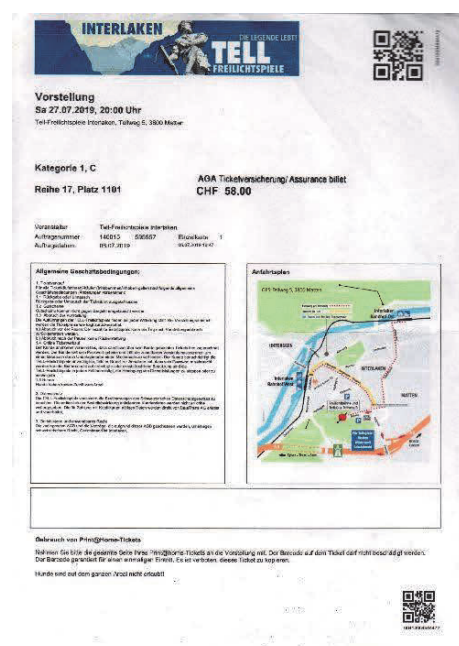


写真-7 チケット



写真-8 織の立つエントランス



写真-9 弓矢



写真-10 過去のポスター



写真-11 テルになって



写真-12 テルと一緒に



写真-13 軽く腹ごしらえ



写真-14 天井から吊された矢の刺さった林檎



写真-15 テル・グッズ



写真-16 野外舞台と観客席

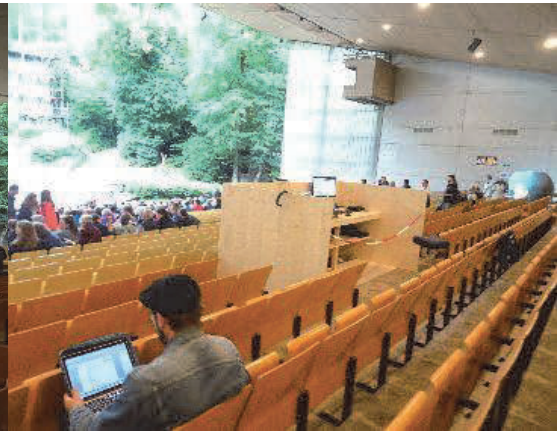


写真-17 開幕前



写真-18 開幕前の野外舞台は少雨



写真-19 飾りを着けた牛の登場



写真-20 役者たちの登場

幸い、雨も上がり、舞台が始まる。（写真-19～26）

出演は、村びと約 180 人、牛、馬、山羊、羊、犬など、すべて本物だ。もちろん、当時のスイスの民族衣装も着ている。

こんな大規模な劇は、観たことがない。どんな台本、稽古で成り立っているのだろう。その迫力に圧倒される。



写真-21 山羊たちの行進



写真-22 牛たちも去る



写真-23 村人たちが集まる



写真-24 松明を持って



写真-25 幕間の休憩時間



写真-26 屋台も出て、人々は野外の舞台へ

後半は、いよいよテルが弓を引く刻になる。（写真-27～32）

代官の掲げた帽子に拝礼しなかったと因縁をつけられ、弓矢の名手といわれたテルは、息子の頭の上に乗せられた林檎めがけて矢を射ることになる。射誤れば、息子の命を奪いかねない。見事、矢は林檎を射るが、別に持った第2の矢の理由を糾され、テルは捕縛され、移送されることに。移送中に、テルは逃亡し… あとは、ご存知のとおり。

開場前に一番乗りした私は、待合椅子で待っていた。すると、頭の禿げた、いかにも気安そうなおっちゃんが、すぐ横で、「籠盛」をもらって嬉しそうにしていた。何と、この

方がテル役の俳優さんだった。どんな方々が、この劇の各配役をこなすのだろう？興味
尽きない。



写真-27 代官との対峙



写真-28 無理難題を



写真-30 アッという間に、矢は林檎に



写真-29 弓を引き、矢を射る



写真-31 燃える館



写真-32 大団円

大規模なステージと演出、多数の出演者の熱演から、スイス国民の「愛国心」がヒシヒシと伝わってくる。会場は、涙と拍手、拍手であった。

4. あとがき

「旅」をどれだけ味わうことができるかは、そのひとの資質に関わるものかもしれない。それは、人生も同じ。できるだけ、多くのモノに接し、深く感じ、味わいたい。

そして、結論は、「夏のスイス旅は、如何でしょう？」

「山歩き」方々、インターラーケンでの「野外劇」鑑賞が特にお勧め。きっと、得るものも多いと思います。そこには、異なる慣習・社会があり、参考となる知恵があります。

最後に、インターラーケンから「宿」としたグリンデルワルトまでの帰途の交通便の紹介です。（写真-33、34）

終演時刻には、登山電車は運行しておらず、最悪、タクシーも考える。さすがに観光立国、日付をまたぐ深夜バス運行がある。そして、時刻表に記載された時刻までにインターラーケン・オスト駅に着くと、定刻の 10 分程前に、バスは「当たり前」という風にやって来る。これも、スイス人気質かな？ 日本人気質に相通ずる。ホッと安堵したことは、いうまでもない。有り難いこと。無事、山の宿に辿り着くことができました。



写真-33 時刻表どおりにやって来た
終わりよければ、すべて善し。



写真-34 グリンデルワルトまで帰る

以上

【参考資料】

- ① 図-1、2：「地球の歩き方 スイス 2018～2019 年版」（ダイヤモンド社、ダイヤモンド・ビッグ社）から抜粋
- ② 写真：天野撮影